蟲干

永代美知代

美彌姉さんが夏休みで歸省つていらつしつてから以來、花枝さんは毎朝姉さんと早起きの競爭をして、ついぞお寢坊で母さんに御世話をやかせるやうな事はありませんでした。

ですが昨夜おそくまで活動寫眞を見てゐたせいか、花枝さんは珍らしく寢忘れて了ひました。

ふとお目々を開けますと、枕元へ一杯朝日が射し込んで、お眠いお目々は尙更まぶしくつて、ねつから開きそうもありません。

『アラッ、私お寢坊しちやつたわ』

花枝さんが斯う思ひながら、矢張り起きしないで、うと〳〵してゐますと、お縁側の方で、何だかガタピシ八釜しい物音が聞えました、如何した事かと、花枝さんは澁いお目々を細めに開けて、そつと其方を見やるのでした、

『アラッ、如何するのよそんなもの？』

『お嬢樣、今日は蟲干なのでございますよ、今年は御親類に混雜があつたものですから、少し遲くなりましたの、ですけどもね、蟲干は結局秋風が立つてからの方がおよろしいのでございますよ』

『だつてそんな空つぽの引出なんか、何だつて蟲干するんだらう』

『これはね、風を入れる爲めなんですよお召物はもう、悉皆お離れの方へ運んで了ひました、だからお嬢樣も早くお目醒め遊ばせな』

花枝さんは大急きで起きました屹度い

ろんな、袿だの袴だの、陣羽織だの珍らしいものがどつさり出るんだわ』

花枝さんはいそ〳〵して、お顏を洗ふと直ぐ、朝御飯なんか頂かないでも可い事にして、ずん〳〵お離れの方へ駆けつけました。

『花枝さんもお手傳ひ？』

朝顏の露でゝもお化粧なすつたのでせう、美彌姉さんは爽かな御容子で、莞爾此方をお向きになりましたですが花枝さんは遲く來て極りが惡いものですから默つてそつとお部屋へ入つて行きました。

十疊のお座敷から六疊のお座敷へ、梁と梁へ風呂敷をあてがつて、部屋一杯幾筋となく渡したお紐の上には、匹田の振袖や、唐織の丸帶や、裾模樣の御紋附や綺麗な美しいものばかり、ずらりと懸けつらねてありました。

花枝さんは呆然見惚れないではゐられませんでしたが、ふと目についたのはこの春お死亡のお祖母樣のお召物です。

『アラッ』

斯う云つた花枝さんは、まるで祖母樣

にお目にかゝつたやうな氣持ちが致しました

よく好きでお召になつた小紋縮緬の二枚重ね、小幅繻珍の黑い丸帶、それから焦茶のお被布、花枝さんは懷しくつて堪まらなくなりました

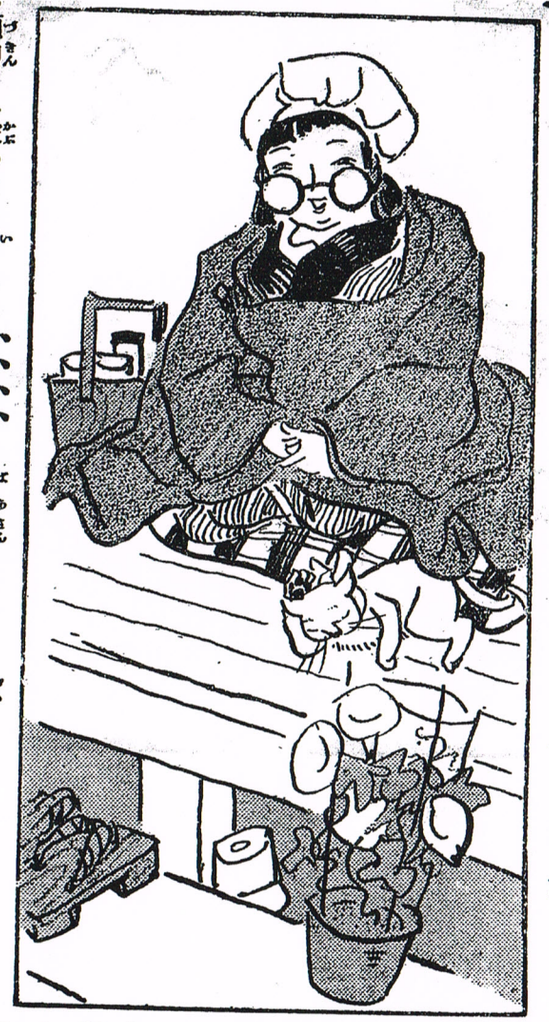
『好いわ私、自分でお祖母樣になりませう』

花枝さんはお福袢まで、黑縮緬の半襟のかゝつたお祖母樣のを探し出して、上から下へ無皆着代へて了ひました

『全く私お祖母樣になつたわ、これで眼鏡をかけて、お頭巾さへ被つたら可いんだけど――』

何處かに眼鏡がありさうなものだと、其處此處見廻してゐますと、お祖母樣のお持ちになつた古代更紗の、大形の紙入のそばに、眼鏡も大黑頭巾もちやんと並べてありました

花枝さんは早速お頭巾を被つて、お眼鏡をかけて、澄して床の間の前へお坐りしましたが、又しても眼鏡がずり落ちてお鼻の先きへ落ちさうになる、それまでしました



『ハイ辱う、私は達者で居りますが、おまへはこの頃足腰の痛みは如何ちやなあつさが利きはしませんかい』

『有り難う存じますお蔭樣と大した事もございません』

『それは結構ちや、兎角お互に達者で長生をしたいもんぢやが、お前は私より確か二つ年下ぢやつたな』

『左樣でございます、今年は私も若う七になります』

お夏婆やは何時の間にか本氣で、しんみりした調子になりました。花枝さんは可笑しくなりましたけれど、面白いものが、すつくりお祖母樣のやうだと思ふと嬉しくつて堪まりません

すると裏門の方から誰かしら、敷石を踏んで來るやうです、花枝さんは知らん顏をしてお祖母樣になり澄してゐましたが、ちよいと横目で見ますと、それは出入りのお夏婆やでした

『オヤこれは御隱居樣、おあつい事でございます、お變りも被在いませんか』

お夏婆やは、わざとにこんな挨拶を致しました

ですから矢張りお祖母樣のこわいろを使ひました

『フーム早いもんだねえ、昔の事を考へて見ると、丸で夢ぢや、お互に小供の時分からの仲よしで、よくいろんなおいたをしたつけな』

『左樣でございます隨分致しましたね』

『お前は幼い時分からの猫嫌ひで、よく酷めちや毛を拔いたりなんか、まるで家の花枝みたいな眞似をおしだつたね』

『オヤまア』

お夏婆やはハッとして、今更お祖母樣になつた花枝さんの顏を見上げました

『御隱樣はよく覺えて被在いますこと、ですがあの、花枝孃樣は御機嫌如何て被在いますか』

『花枝かね、花枝はこの頃めつさり音無しくなりました、私が八釜しく云ふものだから、猫を酷めたりなんぞ、些少ともしなくなりましたよ』

『オヤ〳〵それはまア』

お夏婆やが返事に間誤ついて居りますと、花枝さんは美彌姉さんを呼びました

『美彌や、お夏婆やが來たから、お茶でも入れといでよ』

（完）